

2014年10月6日

いくつかのイベントに関わるお話

このメッセージは、1ヶ月半近くも間が空いてしまいました。申し訳ありません。この間、学位授与式などの種々のイベントがあり、関連したお話をオムニバス形式にて示すことにさせていただきます。

大学機関別認証評価・大学機関別選択評価研修会

2014年9月2日に大学機関別認証評価・大学機関別選択評価研修会が開催されました。冒頭、挨拶させていただきましたが、その抜粋を以下に示し、教職員のみなさんへのメッセージの一つとさせていただきます。

「国立大学が法人化されて10年が経ちます。その成果は、国立大学が学内資源配分や再配分機能を持ったこと、目標管理ができるようになったこと、運営システム設計の自由度を得たこと、競争的環境が定着しつつあることなどがあるとされています。そのいずれもが広い意味での評価と深く関わっており、毎年の年度計画に係る業務実績評価をはじめとして、評価を受ける機会が多く、「評価疲れ」という言葉を、相変わらず耳にするようにも思います。

しかし、評価をどう捉えるかは我々、埼玉大学の側の問題であって、その捉え方によっては「疲れ」とは無縁のものになると考えています。実際、24年度から25年度に行ったミッションの再定義は、自己点検・自己評価を含んだ一つの「評価」と捉えることができますが、埼玉大学ではこのミッションの再定義に積極的に取り組み、独自の機能強化構想である「学部の枠を越えた再編・連携による大学改革～ミッションの再定義に基づく研究力と人材育成の強化」を策定、国立大学改革強化推進補助金を得て、現在、順調に改革を進めていることは、みなさんご存知のとおりです。

埼玉大学では、第3期中期目標・中期計画期間の始まる平成28年度に大学機関別認証評価および選択評価（B地域貢献）を受けることとし、そのための自己評価を平成28年6月までに行います。平成27年6月までに策定すべき第3期中期目標・中期計画とあわせ、この機関別認証評価を積極的に捉え、しっかりとしたデータ収集・蓄積とデータ分析を行って、改革が進みつつある埼玉大学の個性とブランディングをより一層明確にし、さらなる発展を目指したく考えています。

みなさんの一人一人が、それぞれに関係する埼玉大学の強みや特色、個性をどのよ

うに引き出すかを意識しつつ、機関別認証評価・選択評価のための自己点検・自己評価に取り組んで頂いて、埼玉大学の更なる発展に繋げて頂ければと思います。」

照明学会全国大会と日本科学教育学会年会

2014年9月に埼玉大学を会場校として2つの学会が開催されました。照明学会全国大会と日本科学教育学会年会です。その際、開催大学の学長としてご挨拶し、お越し頂いた参加者の方々に、埼玉大学の良いところを二つアピールしました。

「一つ目は、学生の良さです。この学会でも埼玉大学の学生がお手伝いさせて頂いており、接点をお持ちのことと思います。彼らは埼玉大学生 9000 人のごく一部ですが、その純朴さや素直さは埼玉大学の宝です。二つ目は会場となっている緑多い埼玉大学のキャンパス。四季折々にその美しい姿を見せてくれます。と同時に、最寄りの駅から適度に離れた、アイソレートされたキャンパスは学修や学会に最適です。その他、埼玉大学の良さは沢山ありますが、みなさんに実感頂けるであろうことのみご紹介させて頂きました。」

学位授与式

2014年9月19日に9月卒業生・修了生に対する学位授与式が執り行われました。その学長式辞の全文は大学ホームページ・「学長メッセージ」から選択してご覧頂けますが、ここでは、その一部を抜粋し、私のメッセージを教職員のみなさんにもお伝えしたく思います。

「埼玉大学では、防災、環境、社会基盤を対象に、真のレジリエント社会構築のための研究・教育・国際貢献を目指し、今年4月に埼玉大学レジリエント社会研究センターを設置しました。この背景には、埼玉大学在学中の皆さんの生活にも多大な影響を及ぼした3年半前の東日本大震災をはじめとして、この夏の日本各地での大雨による自然災害など、人間社会が存在する地球の変動とその脅威が増大しているという事実があります。

レジリエンスとは、精神的回復力などと訳される心理学用語ですが、元々は物理学用語で、外力によるひずみを跳ね返す力を表し、脆弱性の反対の概念です。最近では、防災や減災の分野でよく使われるようになり、「レジリエントな社会づくり」といった使い方がなされ、柔軟性があり災害に強いコミュニティを作っていくことを意味しています。

「想定外」という言葉を安易に使うべきではないものの、将来に影響を及ぼす行動を起こす際には、何かを想定せざるを得ず、将来を 100%確実に予測できないという意味において、「想定外」のことが起こることは「想定内」のことと言えます。したがって、自然災害に対するこれまでの考え方の主流であった防災というハード的対策は、災害への備えという意味で、人間社会における安全保障策として大変重要であるものの、災害への備えだけでは「想定外」のことが起きた場合には無力であることは明らかです。この災害への備え（pre-risk）に加えて、災害時の対応（on-risk）と災害後の復旧（post-risk）というソフト的対策を想定するのが、自然災害に対するレジリエントな社会という新たな考え方です。

歴史を振り返れば、人間は常に悲惨な災害や事故を教訓に前に進んで来ました。最近の、レジリエンスというこの新たな考え方も、災害や事故に繋がった人間社会の未熟さを真摯に受け止め、硬直化しがちな人間の考え方をいかに柔軟にできるか、ということの重要性を教えてくれています。

このことは個人についても言えます。人は「なにかにぶつかり、迷い、挑戦し、失敗し、ということを繰り返すことになります。しかし、そうやって自分で育ててきた感覚のことを「自信」というのです。」これは解剖学者・養老孟司氏が最近の著書『「自分」の壁』（新潮新書、2014年）の中で述べていることです。失敗の繰り返しにより、自分を育てることの大切さを個人としても十分に認識する必要があります。勿論、失敗を前提として人は行動するわけではありません。しかし、失敗を恐れて行動しないのでは人は自信を持たず、前に進めません。

一方、科学史研究者の村上陽一郎氏は、雑誌『学燈』（丸善出版株式会社、夏号、Vol.111、No.2、2014年）で「競争的環境と学問」と題した小論を発表しています。その中で、彼は、「人間は、原理的に、結果を問うことなしに、常に知識を求める存在である」こと、「社会的なリターンを目指さない研究への支援は、そのような人間の本性に敬意を払うことに他ならない」こと等を指摘した上で、こう続けています。

「競争そのものが本来的に悪いと言いたいのではない。人間の向上の動機の一つとして、競争が重要なものであることには間違いない。もっとも、その際の競争相手は、必ずしも「他者」ではない。むしろ、自身の中にある。現状に満足する心、「まあいいか」と自分を納得させてしまう心、そうした心と競争する向上の思いを忘れては、人間は、退廃への途を辿るだけになってしまう。背伸びは悪いことのようにいわれる

が、「より高い」何ものかを目指すことは、人間にとって不可欠の動機であろう。」

皆さん、失敗を恐れずに背伸びをして「より高いもの」を目指しませんか？ ただし、失敗した場合には、自身の未熟さを真摯に受け止め、硬直化しがちな自分の考え方を柔軟にすることの重要性を必ず思い出して下さい。」

学 長 山口 宏 樹